PROGRAM

神戸大学

開学記念祭

第11回

神戸大学

開学十一回記念祭

1960年5月 13, 14, 15日　於　六甲台

開学記念祭を迎えて

第11回開学記念祭実行委員長

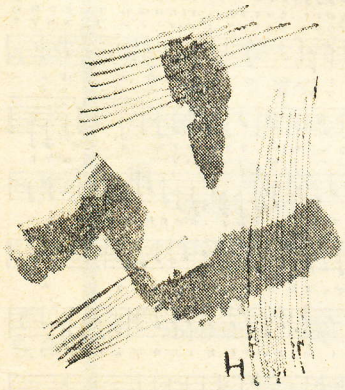
星　野　和　子

戦後たこの足大学として出発したわが神戸大学が、その悪条件を克服しつつ、学舎統合への歩みを進める時、全学統一した開学記念祭を四たびここに迎えることは、我々神戸大学学生教職員一同にとっても非常な喜びとするところであります。昨年1年間、我々は黒岩問題、学長選を斗う中で学園の民主化をさけんできました。そして、それは学園の自治、学問の自由を獲得して行く新しい学園造りの斗いとして大きな成果をあげてきたわけです。

新しい学園、そこにおける〝文化〟は我々自身の手によって創造されたものでなければなりません。支配者からの激しいイデオロギー宣伝、安易な大衆娯楽の頽廃的なムードの中で、我々の欲するものは何か。それは明るい健全な文化、我々に生きる喜びを与える文化、未来への、新しい社会への展望をもった文化でありましよう。しかし今、学園の情勢は決して楽観できません。教育、法律、経済あらゆる部内に外部からの圧迫・干渉が我々をしめつけています。我々は、こういった支配者側からの攻撃をはねかえし、一方では積極的に学園文化の創造的発展のため、努力すべきであろうと考えます。

開学記念祭はただ単に大学の誕生日を祝うというだけではなく、今や、反動文教政策をしめ出していき、我々自身の手により学園文化を創造していく大きな斗いとしての大きな意義をもっていることを忘れるべきではないでしよう。各サークル、ゼミナールは1年間の創造活動、研究活動の成果をここに発表し、一般学生との批評活動と創造活動を結合させ、さらに新しい出発とすべきでしよう。

最後に、今日の大きな発展を見るためには、多くの先輩諸兄姉のたゆまざる大きな努力と、全学自治会の組織のもとで、一丸となって準備を進めてきた多くの学生の力にあずかること大であったことをつけ加えて、挨拶に代えたいと思います。



第3日

15日

於六甲学舎

サークル発表（講堂）

10.30 合　唱……御影グリークラブ
ドイツ合唱曲
日本合唱曲

11.00 合　唱……御影混声
野ばら
ローレライ
美しき青きドナウ

11.30 合　唱……御影オンチコーラス

12.00 合　唱……教職員組合

12.30 昼休み

課外ゼミ

不当解雇をめぐる裁判
法律相談部
（10.30—12.30 306教室）

現代の表現としての俳句
俳句会
（10.30—12.30 会議室）

現代の科学技術における問題点
講師　湯浅光朝
理学部自治会
K.B.K. 神大支部
（10.30—12.30 232教室）

球技大会（第二課程）
（10.00—1.00 運動場）

1.00 講演

学園の自治・学問の自由
元一橋大学々長　上原専綠

3.00 音楽会

神戸大学グリークラブ
黒人霊歌
ドイツ合唱曲集

神戸大学オーケストラ
「皇帝円舞曲」ヨハンシュトラウス
「交響曲第一番ハ調長」ビゼー

教育学部音楽科

階級意識の測定
社会学研究室
（3.00—5.00 211教室）

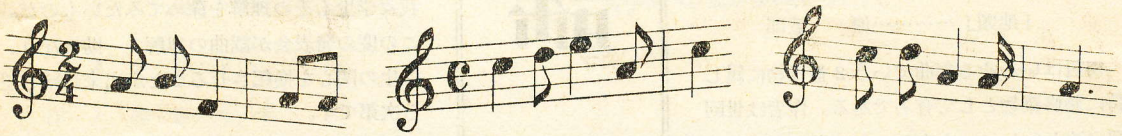
合評会
（3.00—5.00 217教室）

6.00 フィナーレ
フォークダンス

閉会の辞　開学記念祭実行委員長　昌野和子

音楽

■音楽■音楽■音楽■音楽■音楽■音



オーケストラ

（神戸大学交響楽団）

○ヨハン・シュトラウス「皇帝円舞曲」
○ビゼー「交響曲第１番ハ長調」

指　揮　　長谷川晶春・中島良能

○皇帝円舞曲（作品 437）は、作品番号を見るとかなり後期のもののようであるが、これは出版がおくれただけのことで、実際に作曲されたのは、1848年頃である。作品の経緯については、これがオーストリア皇帝の御前演奏のために書かれ、皇帝に献呈されたという以外に詳しいことはわからないが、行進曲風なワルツという点で今までのワルツとはまたちがった趣をもっており、彼のワルツの中でも異色な存在を占めている。軍隊の行進を思わせるような２拍子の序奏で始まり、小太鼓が勇壮な気分を添える。やがて独奏チエロに導かれてワルツの主部に入り、ハ長調の第１ワルツとなり、ファゴットとホルンが華麗な旋律を歌う。第２ワルツでは、弦とクラリネットが優しい主題を歌う。第３ワルツでは、雄々しい気分に溢れ、壮麗さを加えて第４ワルツに入る。コーダはかなり長く、既出の主題を扱って華麗の限りをつくし堂々と曲を結ぶ。

○ビゼー「交響曲第１番」

ビゼー、1855年、17才のときの作品、すでに彼の個性をよく表わしており、先輩たちの影響が明白にみられるにもかかわらず、その明快さと親しみやすさによって今なお広く演奏されている。この曲は全く何らの顧慮なしに発想に従って流れるように思いきり素直に書かれており、借り物的なところがなく、年若い才能が素朴に表わされている。初演は、1935年２月26日ワインガルトナーの棒によりスイスのバーゼルで行なわれた。

第１楽章　アレグロ・ヴィヴォ　ハ長調　4＼4拍子
ソナタ形式

序奏はなく、まず全奏ffで始まる第１主題が、木管楽器による動機をはさんでくり返される。続いてト長調の弦楽器の旋律に次いで楽器群が、種々に交錯して理詰な発展を示し、オーボエ独奏のト長調で流暢な第２主題が現われる。

第２楽章　アダージョ　イ短調　9／8　拍手

ホルンと弦楽器群による和音の上に木管が奏する８小節の静かな序奏の後オーボエで歌うように主題が現われる。このメランコリックな旋律は、ヴィオラのピチカートによる分散和音で伴奏され、ビゼーの音楽にしばしばみうけられる南国風の趣をみせてくれる。

第３楽章　アレグロ・ヴィヴァーチェ　ト長調
2／4拍子

性格的に一貫性をもたないこの交響曲の代表的部分で軽快なイタリア的旋律とベートヴェンふうの重く構築的な形式とが、かみ合ったスケルツォである。スケルツォ主部は２つの主題からなる。

第４楽章　アレグロ・ヴィヴァーチェ　ハ長調
2／4拍子

ソナタ形式弦楽器のトレモロによる短い序奏に導かれて、第１バイオリンが小刻みな生き生きした第１主題を奏する。これは第４楽章を通じて絶えずくり近される。と、突如管楽器群が行進曲風の副主題を奏し始める。

混声合唱

（御影分校混声合唱団）

指揮　井上　和雄　　伴奏　吉田

○ 野バラ
○ ローレライ
○ 美しき青きドナウ

「野バラ」と「ローレライ」はいうまでもなくドイツの民謡とでもいえるものです。「野バラ」の歌詞はゲーテのものですが、これにウェルナーがメロディーをつけました。映画「野バラ」の中で、ウィーン少年合唱団が歌ったのを覚えておられる方も多いと思いますが、あの天を響きわたっているような、かれんな美しさが、この曲の持っているものでしょう。「青きドナウ」はワルツ王ヨハン・シュトラウスの作品で、よく知られたものです合唱曲としても、容易に歌えるように編曲してありますので、よく親しまれているようですが、ウィンナ・ワルツは、ワルツの中でも独得のリズムをもち、日本人には少々むずかしいようです。